
デジモンテイマーズ 2

eagle.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンテイマーズ2

【Nコード】

N6347M

【作者名】

eagle.

【あらすじ】

200X年。

東京都西新宿でおきたデ・リーパーによる首都襲撃事件より2年。世界は平和な時代を迎えていた。が、平和は長くは続かなかった。

新たな出会いと共に止まっていた2年が動き出す……。

序章（前書き）

初めまして。

e a g l e . です。

この作品が生まれて初めて書く小説となります。まだまだ上手く書くことは難しいですが、よろしくお願いします。

この作品は私が好きだった、デジモンテイマーズの2年後という設定にしています。

オリジナルのキャラクターが沢山でてきますので、それでも構わないという人はぜひお読み下さい。

序章

空高く浮かぶ空間。

「……………!!」

何かの音が後方より聞こえる。

それを聞いて一体の青いデジモンが振り返る

「この声って……まずいな。もう追いついて来てる。みんな急げ！」

後ろを振り返りながら走る七体のデジモンたち。後ろから迫り来る何かから逃げているらしい。

「もうダメ。疲れた。ギルモンこれ以上走れないよ」

自分自身をギルモンと名乗った、犬を大きくしたような赤いデジモンがそう言って座り込んだ。そのギルモンより明らかに体が小さく、自身の体に不釣り合いなほど耳の大きいデジモンが必死でギルモンの腕を引っ張ろうとする。

「そんなこと言ってる場合じゃないんだって。時間ないんだから早く立ってよ」

そう言ってギルモンの腕を引っ張るが全く動こうとしない。先に前を走っていた人型の黄色いデジモンがギルモンたちに向かって叫ぶ。

「何をやっているギルモン！テリアモン！」

少し怒り気味に言われたテリアモンは、ムッとなって黄色いデジモンに向かって叫び返した。

「なんで僕まで怒られんのさ。ギルモンが悪いんだよ」

そう言っただけでテリアモンはギルモンの手を話してみんなを追い掛ける。黄色いデジモンも再び前を向いて走り出した。

置いてきばりにされたギルモンが焦って立ち上がりみんなを追いつける。

「テリアモン、レナモン。まって。まってよ」

「ひゃー。おっきいな」

ギルモンは上をみて、驚いていた。

七体のデジモンたちは大きな扉の前に辿り着いた。上を見上げて一番上がギリギリ確認できるかどうかというほどの大きさだ。その扉の前に立った、体が白く額に黒と赤の三角形のマークが入っているデジモンが、扉を開けようとするがビクともしない。

「ふぬぬぬぬぬ……。ダメクル。開かないクル」

そう言って白いデジモンはしょんぼりした。

紫色の犬のようなデジモンが上を向いた後、みんなに意見を尋ねた。

「話には聞いていたけどここまで大きいとは……。どうする?」

「ドルモンのパワーで扉、壊せないかな?」

と、テリアモンが呟いた。黄色いデジモン、レナモンは、一体のデジモンに尋ねる。

「ルナモン。チンロンモンから何か聞いていないか?」

ルナモンと呼ばれた四つの耳がある白いデジモンは、少し考えてから答えた。

「たしか、扉の前まで行けば後は何とかするってチンロンモンは言ってたけど……」

その時、眩い程の光が地上から扉に向かってとんできた。

「なんだ！？この光は？」

ずっと後ろを気にしていた青いデジモンが目を抑えながら言った。

その光は扉に降り注ぎ続けた。みんなは、この光がこのまま扉を壊すんじゃないかと思った。光はそれほどのエネルギーだった。すると、この巨大な扉が少しずつ開き始めた。この光に呆気にとられていたレナモンが呟く。

「これは、チンロンモンの……？すごいエネルギーだ」

あっという間に扉は開ききった。扉の向こうは七色の光に包まれた不思議な空間が広がっていた。それを見て絶句するデジモンたち。

青いデジモンはみんなに、さあ行こうと言おうとした、その時。

後方より炎がとんできた。すかさずレナモンはマークのある白いデジモン、クルモンを守り、他のデジモンたちも防御体制をとった。幸い誰もケガはなく安堵した。が、安心している場合ではない。振り向くとギルモンたちより大きなデジモンが十五体近くいた。

「もう。ほんと、しつこいな。あっち行ってよ」

と、テリアモンは嫌そうに言った。

するとその中の一体、赤い体をしたティラノモンが叫んだ。

「そうはいかん。誰一人として現実世界リアルワールドに行かしはしない」

「誰一人って、僕たち人じゃないし」

と、テリアモンは相手を挑発するように言った。

「でもこの状況、かなりヤバいぞ。どうする?」

青いデジモンがレナモンに案を求めた。

レナモンは少し考えた後、全員に向かって言った。

「ブイモンとルナモンとドルモンは、クルモンを連れて先に行ってくれ。ここは私とギルモン、テリアモンで何とかする」

レナモンのその発言に誰もが驚いた。青いデジモン、ブイモンがレナモンに対して反論した。

「何言ってるんだよ。危険だ。俺たちも一緒に戦う!」

「ダメだ!」

レナモンが怒鳴りつけるように叫んだ。

「ここで全員で戦ってもおそらく全滅する。だから、自分たちで進化できる私たちが足止めする。その間に早く現実世界へ！」

「そんな……、そんなこと出来ないよ」

ルナモンは悲しそうに呟く。ここに残ると言うことはかなり危険なことだ。下手をすれば相手にデリートされるかもしれない。だから自分の仲間、友達をおいていくなんて出来なかった。

するとテリアモンがいつものように明るくマイペースに言った。

「モーマンタイ、モーマンタイ。僕たちは大丈夫だよ。ね？ギルモン？」

「んー、ギルモンよく分かんないや。でもギルモンたちは絶対に負けないよ」

そうやってギルモンは頷いた。

「でも……」

なおもブイモンは納得出来ない。もしかしたら、このまま二度と会えないかもしれない。表情から察するとおそらくテリアモンとレナモンは覚悟しているんだろう。ギルモンは余り分かってなさそう

だが……。

するとクルモンが耳を広げて飛んだ。

「大丈夫っクル！ギルモンたちは強いクル！」

こんな時でもクルモンは明るい。本当にギルモンたちを信じているんだろう。ブイモンはそう思った。

「分かったよ。俺たちはクルモンを連れて先に行く」

ブイモンはそう言って扉のほうを向いた。

「「ブイモン！？」」

ルナモンとドルモンの声が重なった。

「何を言ってるんだ？分かってるのかブイモン？ここで別れたら……」

「そんなこと分かってる！」

ドルモンの反論はブイモンの言葉によって途中で切られた。

「分かってる……分かってるよ。でも、ギルモンたちは友達だ！！
だったら俺はギルモンたちを……友達を信じたい！！」

ブイモンはみんなに向かって、強く叫んだ。その言葉にルナモンが眩く。

「ブイモン……」

「ギルモンたちを信じよう？」

その言葉はルナモンたちに言っているというよりは、ブイモン自身に言い聞かせて入るようだった。

「そうよね。そう簡単にレナモンたちがやられたりしないよね……」

頷くようにルナモンは言った。

「分かった。クルモン！」

ドルモンも頷く。そしてクルモンを連れて扉の先へと進んで行く。

「私も！」

次にルナモンが進んで行った。

ブイモンも扉に向かって行く。しかし、入り口の一步手前でブイモンは立ち止まった。そして、ギルモンたちのほうを振り向かずに、

「また……会えるよな？」

と、消え入るような声で尋ねた。

「当たり前じゃん。すぐに後を追うよ」

あくまでもいつものどつりの話し方でテリアモンは答えた。

「また後でね。バイバイ」

ギルモンもいつものように無邪気だった。

「約束する」

レナモンは強く答えた。

その三人の答を聞いて、ブイモンは光の中へと駆け出した。

後ろから聞こえるギルモンたちの進化の声。

それがブイモンが聞いたギルモンたちの最後の声だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6347m/>

デジモンテイマーズ2

2010年10月11日13時02分発行